

岐阜県博物館館内で採集された

ヒメタイコウチについて

*千藤 克彦, 説田 健一 (岐阜県博物館)

1. はじめに

ヒメタイコウチ *Nepa hoffmanni* は、半翅目タイコウチ科の昆虫で、湧水を伴う湿地のような半陸棲の生活を送るという特異な生態を持つ。また、前翅が開きにくく後翅が退化しているため、飛ぶことができず移動能力が極めて低い。本種は静岡県から兵庫県や香川県にかけて局所的に分布することが明らかになっている。本種の生息地である湿地、湿原は、宅地造成等の開発により急激に減少、悪化の一途をたどっており、生息が確認されているすべての県で絶滅の恐れのある生物に指定されている。

岐阜県内では、中津川市から多治見市に至る東濃地方全域と可児市、御嵩町、関市、各務原市で生息が確認されている。岐阜県博物館が所在する岐阜県関市小屋名の岐阜県百年公園内でも生息が確認されているが、今回、博物館の建物内でヒメタイコウチが採集された。飛べない水生昆虫であるヒメタイコウチが、生息地の湿地からかなり離れた尾根近くの建物内で採集されたことは衝撃的で、このような例はこれまで報告されたことがなく、ヒメタイコウチの知られていない生態を示唆していると思われる。本稿では、ヒメタイコウチの侵入経路ならびに、推定される行動生態について検討した。

2. 採集された状況

ヒメタイコウチは、岐阜県博物館が行っている総合的有害生物管理 (IPM) の一環として、建物各所に置いている粘着シートトラップの一つから見つかった。トラップは団体入り口に仕掛けられていた

もので、2024年2月16日に設置し、同年5月10日に回収した。このトラップは、粘着シートのみで、誘引物質などは使っていない。岐阜県博物館は岐阜県百年公園内の丘陵地の中腹に造成されていて、団体入り口あたりで海拔およそ80m、谷底の湿地がある部分で海拔50~60mである。採集されたヒメタイコウチは1個体で、体長17mmのオスの成虫である。

3. 考察

採集された状況から、ヒメタイコウチが生息地である湿地から博物館建物まで自力で歩行移動してきた可能性が高いと考えられる。侵入経路は西側の丘陵地の尾根を越えて入口に到達した可能性が高く、一番近い生息地からは直線距離で約200m、高低差20mほどあり、少なくともこれだけの移動能力を持っていることになる。ヒメタイコウチが能動的に陸地を歩行移動している可能性が示唆される。ヒメタイコウチは、1月から3月にかけて生息地からいなくなり、4月には再び増加することが知られており、その行き先はわかっていない (伴ほか1988)。岐阜県博物館の建物内で採集されたヒメタイコウチは、2月から5月の間にトラップにかかっており、越冬期に生息地から移動した個体が採集されたものである可能性が高い。

ヒメタイコウチの越冬期の移動行動と、その移動範囲を明らかにすることが、絶滅の恐れのあるヒメタイコウチの保全を考える上で重要になってくると思われ、その解明が望まれる。